

仙台大学 広報室

Monthly Report

ハワイ大学バスケットボールコート

仙台大学の施設を拠点としたスケルトン選手育成事業—ユースオリンピックスケルトン日本代表の郷内翔選手(岩沼中2年)らが宮城県副知事を表敬訪問

郷内選手の健闘を祈って、固い握手が交わされた＝宮城県庁
左から：進藤コーチ・郷内選手・鈴木副学長・阿部学長

2月12日からノルウェーのリレハンメルで開催される「第2回ユースオリンピック冬季競技大会」のスケルトン競技に日本代表として出場する郷内翔選手(宮城・岩沼中学校2年)と本学の阿部芳吉学長・鈴木省三副学長(ユースオリンピックスケルトン日本代表監督)・進藤亮祐新助手(同スケルトンコーチ)らが2月3日(水)に宮城県庁を訪れ、三浦秀一宮城県副知事に出場報告を行いました。

郷内選手は、公益財団法人東日本大震災復興支援財団からの支援を得て展開している「みやぎジュニアトップアスリートアカデミー」事業(将来、オリンピックや国際大会・国内トップレベルの大会で活躍するための資質をゴールデンエイジ(9～12歳)に身に付けるためのプログラム)の修了生で、現在は仙台大学の施設を拠点に活動を行なっています。同アカデミー事業の修了生で、ユースオリンピック出場は郷内選手が初めて。

副知事表敬訪問の代表挨拶で鈴木副学長は「郷内選手のユースオリンピック出場までの道のりは平坦ではなかった。2年間、スケルトン競技に挑戦した本人(郷内選手)の努力は素晴らしい。スケルトン競技を通して人間力を磨き、復興を支える力を有する先導的な人材として活躍することを期待している」と話されました。続いて、郷内選手は「ユースオリンピックに出場する夢が実現できて本当に嬉しいです。感謝の気持ちを忘れず、お世話になった皆様への恩返しになる思いを込めながら、スケルトンの滑走に全力を注いでいきます」と力強く決意表明を述べました。

三浦副知事からは、「ユースオリンピックを通して、海外で友人ができたりするなど、たくさんの素敵な思い出を持ち帰ってきて下さい。その先に本物の冬季オリンピックが見えてきます」と激励の言葉が述べられました。

【裏面：ユースオリンピック／男子スケルトン・郷内選手は15位】

< 目 次 >

仙台大学の施設を拠点としたスケルトン選手育成事業—ユースオリンピックスケルトン日本代表の郷内翔選手(岩沼中2年)らが宮城県副知事を表敬訪問	1
アスレティックトレーナーの本場 米国・ハワイ大学でAT研修を実施	3
阿部学長が熊原投手(横浜DeNA)と硬式野球部を激励	6
「スポーツ、体育を基盤にした健康福祉を創造する」をテーマに「第11回健康福祉研究会」を開催／「健康福祉学科開設20周年を祝う会」も開催される	7
仙台大学主催「第2回学術講演会」を開催—体育学の過去・現在・未来	8
OB紹介・ホテルベルエア仙台 取締役 統括部長 高野竜雄さん	9

学生の活躍や、取組みをご存知でしたら
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関にも旬な話題を提供していきたいと考えております。

本誌へのご意見・ご質問等がございましたら、広報室までご一報ください。

広報室

TEL 0224-55-1802

FAX 0224-57-2769

Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

スポーツを英語で語るキャンパス創り

"A campus for Sports Education through English"
—LET'S TALK SPORTS IN ENGLISH!—2017年創立50周年
50 years Anniversary of Establishment in 2017

SENDAI UNIVERSITY Since 1967

SPORTS FOR ALL ～スポーツは健康な人のためだけでなく、すべての人に～

ユースオリンピック／男子スケルトン・郷内選手は15位



レース直前の郷内選手(右)と進藤
＝ノルウェー・リレハンメル

2月19日に第2回冬季ユースオリンピックがノルウェー・リレハンメルで開催され、スケルトン競技で仙台大学を拠点にトレーニングを行っていた郷内翔選手（岩沼中2年）が出場、20人中15位となりました。郷内選手は宮城県から仙台大学への委託事業である「宮城ジュニアトップアスリートアカデミー」の第1期修了生です。アカデミー修了後にスケルトン競技を選択した郷内選手を宮城県ボブスレー・リュージュ連盟が受け入れ、鈴木省三副学長を中心に新助手進藤と2年間、第1回ユースオリンピックの際の『伊達なスポーツプロジェクト』のノウハウを活かしつつ、仙台大学の施設を利用し育成してきました。

昨年12月にオーストリアとノルウェーで行われた予選会に国内外から36人が参加し、ランキング順に郷内選手は18位で20位までの出状枠を勝ち取り、今回のユースオリンピックに最年少選手として出場しました。

レース当日は、前日までの温暖な天気ではなく、外気温、氷温ともに低くレースに相応しい天候で、郷内選手の持ち味であるプッシュ（ソリを押し出す動作）で得た前半の加速をゴールまで失速させずに滑走する事ができるのか？ が勝負のポイントでした。



ユースオリンピックの年齢枠が14～17歳という中で郷内選手は唯一の14歳、周りの選手が16～17歳の中、3人抜いての15位は大健闘だったと感じています。

レースを終えた郷内選手は「今の實力における最高のパフォーマンスができ、今回の競技会を終えてやっと世界への挑戦が始まった気持ちです。今後は、ジュニア選手としてナショナルチームに選出されるようトレーニングを積み重ね、トップを狙っていきます。ジュニア選手に選ばれるには仙台大学の学生に勝たなければいけないので、日頃から大学生と切磋琢磨し活動していきます」と感想を述べました。

選手達はユースオリンピックで文化・教育プログラムにも参加するなど、競技以外での学びもありました。スケルトン競技のロールモデルアスリートはイギリスのトリノオリンピック銀メダリストShelley・Rudman氏で、選手達はRudman氏と一緒に空気抵抗について身近にあるものを使い、考えて実践するプログラムに参加しました。また、Rudman氏が現役時代、どのように活動してきたのかを実際に聞くことができ、非常に有意義な体験となりました。



次回、第3回冬季ユースオリンピックは2020年スイス・ローザンヌで行われます。これまで2回の経験を活かし、今後もスケルトン競技の中心に仙台大学が関わっていきやすいよう活動していきたいと考えておりますので、応援よろしくお願い致します。

最後にこの度、この様に現地で郷内選手へのサポートする機会を与えて頂きました朴澤理事長・学事顧問、阿部学長はじめ多くの関係者に厚く御礼申し上げます。



<報告：新助手 進藤 亮祐>

アスレティックトレーナーの本場米国・ハワイ大学でAT研修を実施



ハワイ大学野球部の選手の足関節にテーピングを巻く前田さん
＝ハワイ大学ATルーム

本学では、アメリカの学校現場で定着しているアスレティックトレーニング分野についての研究と教育の推進を目的として、ハワイ大学マノア校と交流を行ってきました。平成15年からは、希望する学生たちがアスレティックトレーニング研修に参加し、本場での実践を自分の目で確かめています。平成16年度にインターネットを利用したアスレティックトレーニングについての遠隔授業を開講し、多くの本学の学生が本場のアスレティックトレーニングの実際を学ぶことができました。遠隔授業の受講者、研修に参加した学生の中には、本学卒業後にハワイ大学大学院に進学し、アメリカのNATA(National Athletic Trainers' Association)のアスレティックトレーナー資格を取得する者もいます。平成26年9月には、本学とハワイ大学マノア校教育学部間で、国際学術交流に関する基本合意書が締結され、今後は同校との連携によりさらなる発展が期待されます。

今年2月8日(月)から2月15日(月)にかけて、「平成27年度ハワイ大学AT研修ビギナーコース(通算22回目)」が実施されました。同研修は、日本学生支援機構の海外留学支援制度(短期派遣)に継続して採択されているプログラムでもあります。

今回のAT研修には、米国のNATAアスレティックトレーナー資格取得に興味関心のある本学の藤井千絢さん(体育学科2年-宮城・気仙沼西高校出身)・山本郁さん(同2年-宮城・涌谷高校出身)・稲澤裕喜さん(同2年-福島・安達高校出身)・杉山一博さん(同2年-宮城・明成高校出身)・小畑和輝さん(同2年-宮城・泉松陵高校出身)・今野舞子さん(同1年-山形・鶴岡北高校出身)・佐藤光貴さん(同1年-宮城・塩釜高校出身)・太田遥さん(健康福祉学科1年-青森・弘前中央高校出身)・前田美優さん(運動栄養学科1年-千葉・市立船橋高校出身)の体育学科トレーナーコースや、アスレティックトレーナー部に所属する学生9名が参加し、三谷高史講師(引率責任者)・白幡恭子助教・鈴木のぞみ新助手らの教職員が引率しました。

AT研修では、ハワイ大学のアスレティックトレーニング関連の「Athletic Training Clinical Experience」・「Olympic Weight」などの授業に出席。また、同大のアメリカンフットボール部や、野球部で勤務するアスレティックトレーナーの仕事を見学し、また実際に体験、指導いただく機会もありました。学生たちは、ハワイ大学の大柄な選手たちに実際テーピングを巻くなど戸惑いながらも、普段できない貴重な経験に目を輝かせていました。また、ハワイ大学以外にも、本学への遠隔授業やAT研修のプログラムコーディネーターを担当している金岡友樹氏が勤務するマッキンリー高校のアスレティックトレーニングルームや体育施設などを見学。金岡氏は、学生たちに向けて、ハワイのアスレティックトレーナー事情やスポーツ現場におけるアスレティックトレーナーの役割と心構えなどを語り、学生たちは希望と夢を膨らませました。

AT研修の修了式では、お世話になったハワイ大学の教職員に対して、学生一人ひとりから英語でお礼の言葉が述べられ、意欲的に英会話に取り組む姿勢が見られました。同修了式終了後、前田さん(同)は「今から、米国のNATAアスレティックトレーナー資格取得とハワイ大学大学院に進学することを真剣に考えていきたいです。そのためには、自分の英語力(TOEFL)を強化する必要があると感じました。これからも、英語を継続して勉強していくつもりです」。三谷講師は「アスレティックトレーナーとしての専門的な知識や技術を獲得するのは大切なことですが、海外で「自分で何とかする力」は、遠隔授業だけでは身に付きません。現地研修(ハワイ)は、継続的に実施することが欠かせないと思いました」と話されました。

学生たちには、今回のAT研修を通して、英語圏での語学研修や留学を志向し、国際感覚と異文化の見聞を広げ、自己の成長に繋がるのが期待されています。



お世話になったハワイ大学の方々と一緒に

平成27年度カリフォルニア州立大学ロングビーチ校日米スポーツ科学事情比較セミナー



2016年2月7日から2月23日（現地研修期間：2月8日から2月19日）にかけて、平成27年度カリフォルニア州立大学ロングビーチ校（CSULB）における短期研修「日米スポーツ科学事情比較セミナー」が実施されました。参加者は体育学科より、保科政翔（3年）、運動栄養学科より、尾崎洋美（4年）、大林礼佳（3年）、中鉢礼菜（3年）、岩泉莉奈（2年）、伊藤更沙（2年）の4名、健康福祉学科より、阿部伊武輝（3年）、赤崎昌穂（1年）、副島琴実（1年）の3名の参加で、計9名という構成でした。教員は前半に弓田恵里香講師、後半にマーティー特命副学長が入れ替わる形となり、全日程を菅野恵子が引率しました。

このプログラムは2009年8月から始まり、今年で8年目となります。昨年度より、当初の「スポーツ栄養とスポーツマネジメント」に特化した内容から一部変更し、コーチングの講義も含め「スポーツ科学」と、テーマの幅を広げています。そのため、参加学生の専門分野ではない講義もあったようですが、講義中は自分の競技や経験に置き換えて質問するなど、積極的に授業に参加していました。また、尾崎洋美さん（運動栄養学科4年）からは、日本で習った内容を挙げ、米国と日本を比較する質問をするなど、文化の違いについても着目している様子もありました。大林礼佳さん（運動栄養学科3年）は、学んだことに対する感想を自ら発表するなど、主体性も見られ、充実した講義になったと思います。

講義のみならず、施設見学やスポーツ観戦もこのプログラムの魅力の一つです。CSULB校内にあるWalter Pyramidでは、バスケットボールとバレーボールを観戦しました。日中の準備から視察でき、同じ大学生が競技を支えていることや、会場設備に驚きを隠せない様子でした。



バスケットボールの試合では熱心に応援し、合間のイベントでは本学の学生が“アピール”で勝利しピザをもらい会場内のスクリーンに大きく映し出されていました。また、プロバスケットボールNBA観戦では、まず会場の広さに圧倒され、選手のパフォーマンスに感嘆し、日本のスポーツ観戦とは一味違う雰囲気を体感できたのではないかと思います。



プログラムの中には、学生や職員の方との交流の時間もあり、今年のグループはハッピーに着替え“よさこい”を披露するなど、日本文化の一部を紹介していました。

参加してくれた方々と一緒に踊れるように、身振り手振りも交え英語で説明しながら、最後には一緒に踊れるようになっていました。

また、本プログラムでホームステイをするようになって3年目となります。今回は、2～3人1組で4家庭にお世話になりました。家と学校間の送迎だけではなく、各家庭でBBQをしたり合同でテニスをしたり、または子供達と縄跳びをしたりと、日々色々な形でコミュニケーションを取っていたようです。最後の見送りでは涙を流しながらのお別れとなるくらい交流を深めており、各々感謝の気持ちを手紙にし、渡していました。

最後に行われたセレモニーでは、修了書を手渡され、各自英語でスピーチを行いました。なかなかうまく話せず、伝えられない様子も見受けられましたが、たくさんのことを学べたことや、感謝の気持ちを表していました。また、帰国後も英語を勉強したいと意気込む学生もいました。保科政翔さん（体育学科3年）は、CSULB関係者に「また来ます。」と言い、「すごく貴重な経験となりました。今回の経験を今後の大学生活や人生に活かしていきたいと思います。」との感想を述べ、いい刺激になったようです。

本年度も準備から、約2週間のプログラムを無事に終了できたことを関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、来年度もより質の高いプログラムにできるよう、ご協力頂ければ幸いです。



<報告：新助手 菅野 恵子>

平成27年度第3回 新しい東北 交流会 in 仙台 ～この先へ続く東北の新たな挑戦～に参加して

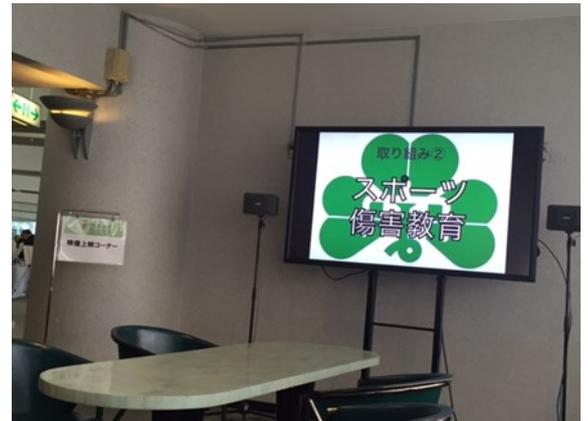


平成28年2月11日（木）、仙台サンプラザホールにて開催された平成27年度第3回「新しい東北 交流会in 仙台」に参加しました。この交流会は復興庁官民連携推進協議会が主催し、東日本大震災の被災県である岩手県、宮城県、福島県の企業・団体が震災から復興していく歩みの中で始めた「新しい挑戦」を紹介し合

い、更なる復興のための情報交換を目的に開催されました。当日は約360団体から760名が来場したそうです。

オープニングは、復興庁の高木毅復興大臣と村井嘉浩宮城県知事による挨拶があり、その後6団体の先導的なビジネスの顕彰がなされました。パネルディスカッション、パネル展示、ブース出展、座談会、取り組み発表会などが会場内各エリアで行われ、来場者は自由に歩き回り参加し、情報収集や懇談をしていました。

私達は資料設置コーナーに新刷のパンフレットを配置し、映像上映コーナーにて活動紹介PVを流して頂きました。私達の参加目的は仙台大学が手掛けている全国的にも新しい分野である「高校ヘアスレティックトレーニングを展開する」取り組みを参加者に知ってもらおうと同時に、もっと地域で認知を上げていくためにはどのように活動を広げたらいいのか、他企業・団体から得る情報のもと向上したいと考えていました。交流会の出展者は復興の現場で新たな挑戦をする90以上の企業・団体で、多くは飲食産業、観光産業、建築産業でした。コミュニティ・町づくりなどを手掛けるNPOや協会もあり、それぞれブース出展やパネル展示を通して活動紹介をしていました。教育機関では東北大学大学院農学研究科が復興農学の研究や人材育成についてブース出展を行い、岩手大学が三陸復興推進機構を立ち上げて教育支援や生活支援などの6部門の取り組みを行っていることを紹介、また、多賀城高校が全国で2校目となる「災害科学科」の開設などを発表していました。数多くの企業・団体が出展をし、360団体から760名が来場したそうですが、残念ながら私達の資料を来場者に手にとって頂くことが少なかったように感じました。



今回はパネル展示やブース出展といったPR機会がもらえず資料配布と映像上映に限られ、活動紹介という意味では十分ではありませんでしたが、次回以降の参加で改めてPR機会を増やしていきたいと考えています。「新しい東北」は官民連携推進協議会のウェブサイトにも情報発信が可能ですので、活用していくことも考えています。[\(http://www.newtohoku.org/\)](http://www.newtohoku.org/) 情報収集という意味では、コミュニティづくりなどを手がける企業の取り組みを知り、中でも子ども達の運動離れを解消すべく始まったイベント企画に共鳴しました。そしてコミュニティづくりと明仙フィールドでの川平AT活動を絡めていくことができないか、例えば子ども達や高齢者とスポーツを通して交流をしていくなど、私達スタッフ間で話し合いを深める良い機会となりました。今後も川平活動のPRの場、地域の取り組みと繋がる場としてこの交流会に継続的に参加していきます。

＜報告：新 助手 白坂 広子
新 助手 小野 勇太
法人事務局 品田 有佳＞

阿部学長が熊原投手(横浜DeNA)と硬式野球部を激励 —沖繩・広島各キャンプ地訪問—



プロ「初登板」の後、沖繩・宜野湾球場内で激励に訪れた阿部学長らと記念撮影する熊原投手

仙台大学が初めて日本プロ野球界に送り出した熊原健人投手(横浜DeNA)と、3年連続全日本大学選手権出場を目指す硬式野球部を応援しようと、阿部芳吉学長が2月17日～19日、沖繩県宜野湾市と広島県呉市の各キャンプ地を訪れ、練習・試合を視察するとともに同投手や部員たちを激励しました。

キャンプ地訪問には、八巻芳信硬式野球部OB会長と高橋義夫硬式野球部長が同行しました。一行は仙台空港からの直行便で沖繩入り。那覇空港から仙台大学同窓会那覇支部・玉城良泰副支部長の案内で横浜DeNAのキャンプ地・宜野湾球場に向かいました。当日の横浜DeNAは韓国・KIAとの練習試合を予定し、熊原投手を「初登板」させるスケジュールでした。しかし、直行便の那覇到着が午後3時過ぎだったため、一行が球場に到着した時には試合終了間際。残念ながら熊原投手のプレーを見ることはできず、最初に目にしたのが初登板を終えて記者たちに囲まれる同投手のインタビュー風景でした。

熊原投手の「初登板」は、翌日のスポーツ紙に掲載された通り、「ほろ苦かった」ようです。同じ新人でドラフト1位入団の今永昇太投手(駒大出)に続く2番手として四回からマウンドに上がりましたが、2イニング投げて被安打4、3失点、2つのバークを取られる結果となりました。その試合後、阿部学長らは球場内で高田繁・球団GMから歓迎のあいさつを受け、熊原投手と約1時間懇談しました。この日の登板について同投手は「試合前のブルペンではすごく緊張したが、本番では比較的平常心だった」と話し、「(結果は)今の自分の実力。シーズン中でなくてよかった。(バークについては審判に)早い段階で指摘してもらえてありがたい。いろいろ課題が浮かんできたので、それを次に生かしたい」と前向きに受け止めていました。

これに対して阿部学長は「横浜スタジアムへの応援ツアーを考えている。頑張って実績を上げ、シーズンオフには帰省して故郷の人びとを大いに喜ばせてほしい」と激励しました。阿部学長らは同夜、真玉橋克彦・同窓会沖繩支部長はじめ、硬式野球部OBを中心とした同支部の人たちと懇親を深め、翌日午前には宜野湾球場で熊原投手の守備練習などを視察して沖繩を後にしました。

キャンプ地訪問第2弾は、硬式野球部員が2月14日から半月間の日程で練習に汗を流す呉市です。同キャンプには森本吉謙監督と坪



井俊樹、田上紳二郎両コーチのほか、入学予定の新人11人を含む51人が参加し、4月9日に始まる仙台6大学野球春季リーグでの3連覇を目指して調整に励んでいます。キャンプ視察は19日朝から夕方まで行われ、練習前のあいさつで阿部学長は全スタッフ、選手に熊原投手の近況を伝える一方、「今年も全日本大学選手権出場を果たし、皆さんがプレーする神宮球場と熊原投手がマウンドに立つ横浜スタジアムでのダブル観戦を実現してほしい」と励ましました。この日は、地元専門学校チームとの練習試合も行われ、阿部学長一行は新人たちのプレーに熱い視線を送りました。



仙台大学同窓会沖繩支部懇親会

<報告：硬式野球部 部長 高橋 義夫>

「スポーツ、体育を基盤にした健康福祉を創造する」をテーマに「第11回健康福祉研究会」を開催／「健康福祉学科開設20周年を祝う会」も開催される



パネルディスカッションの様子=仙台ガーデンパレス

2月26日（金）、「健康福祉」をキーワードに介護・福祉・介護予防などの研究と研修のための「第11回健康福祉研究会」（仙台大学体育学部健康福祉学科主催）が仙台ガーデンパレス（仙台市宮城野区）で開催されました。「スポーツ、体育を基盤にした健康福祉を創造する」をテーマに本学関係者が高齢者における運動の重要性や本学健康福祉学科のこれまでの人材養成について議論し、医療・介護・福祉従事者や本学の卒業生・在学生ら約250名の参加者が熱心に耳を傾けました。

卒業生で聖カタリナ大学人間健康福祉学部教授の丸山裕司氏【写真】

（平成12年健康福祉学科卒）は「高齢期における健康運動について」と題して特別講演を行ないました。同氏から「離島と都市部の高齢者を対象に1日の歩数や運動量を比較したところ、あまり差がなかった」ことが紹介されました。また、高齢者が自分自身で筋力維持に努め、要介護状態を防ぎ、健康寿命を延ばすPPK（ピンピンコロリ）の人生を目指す必要性などについてご講演されました。

パネルディスカッションのテーマは「健康福祉学科のこれまでの人材養成と明日」。介護福祉士養成の立場から本学の大山さく子健康福祉学科長は、「本学科の学生たちは、明るく元気で素直。介護実習先でもコミュニケーション能力があり、レクリエーションも上手と好評を得ている。今後も仙台大生らしさのある介護福祉士を養成していきたい」。教員養成の立場から本学の渡邊康男教授は、「児童生徒の思いや願いに寄り添う姿勢、専門性に裏付けられた臨機応変に対応できる実践力を身に付けた教師を養成したい」。



健康運動指導士養成の立場から笠原岳人准教授は「運動好きの子どもを育てること、働く世代の健康づくりを支援すること、高齢者の介護予防に取り組み子どもも大人も“笑顔”にできる健康運動指導士を養成したい」。本学独自の認定資格である健康づくり運動サポーター養成の立場から小池和幸教授は、「健康づくり運動サポーター（健サポ）の実践の場で、専門的な知識や技術を身に付け、小さな成功体験を積み重ねることにより得られた達成感が自己効力感を高める。学生たちには、健サポの活動を通して、主体的な職業選択や高い職業意識に繋げてほしい」とそれぞれがこれまでの学科における人材養成と今後について話をしました。

最後に、橋本実副学長がパネルディスカッションのまとめとして、「上工は未病を治す。下工は病を治すという言葉があるが、本学健康福祉学科は“未病を治す”人材をこれからも養成していく」と力強く述べられました。

「健康福祉研究会」終了後、引き続き「健康福祉学科開設20周年を祝う会」が開催され、本学の朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長の他、総勢100名を超える同窓生・旧教職員らが集い、盛大に祝う会が行なわれました。



コーディネーター
①橋本実副学長
パネリスト
②大山さく子教授
（健康福祉学科長）
③渡邊康男教授
④笠原岳人准教授
⑤小池和幸教授



「健康福祉学科開設20周年を祝う会」の集合写真

大阪学院大学・(株)ボディプラスインターナショナル一行来訪



2月1日(月)大阪学院大学から総長補佐・白井元康氏、准教授・白井克典氏及び仙台市内に本社を構える(株)ボディプラスインターナショナルの代表取締役・デービット・ホルトン氏他、7名が来訪し、朴澤泰治理事長・学事顧問、阿部芳吉学長、山谷幸司学長特別補佐・運動栄養学科長らと歓談の後、本学施設を熱心に見学され懇親を深めました。

大阪学院大学は1940年に創立された歴史ある総合大学で、大阪府吹田市を拠点に高等学校、大阪学院大学短期大学部、通信教育部、大学院があり、経営者の子弟など、多くの学生達が学んでいます。大阪学院大学は昨今、学生ゴルフ選手権で2年連続の全国制覇を果たし、スポーツの分野をさらに強化したいという構想があるそうで、このたび、北海道・東北地区唯一の体育大学である本学への訪問となりました。

最初に朴澤理事長・学事顧問は「本学は体育系の単科大学として、スポーツ指導者を育成するという大きな目的がありますが、それ以外にもスポーツをサポートする職域に学生達が就職することができるよう、さまざまな領域で勉学できる仕組みを構築しています。

例えば怪我の予防、負傷した選手の一早い復帰を可能とするアスレチックトレーナー資格者(日本・米国)による指導、栄養面から競技者を支える管理栄養士の育成など、スポーツを取り巻く幅広い分野への道筋を展開しています」と挨拶し、阿部学長は「本学では東日本大震災による被災地への継続的なボランティア活動など、社会貢献も学ぶことができます」と話されました。白井元康総長補佐は「ゴルフについてはたまたま2年連続で日本一になることができましたが、ごく限られた優秀な選手以外、その他大勢のゴルフ部の学生達は学生時代、例えどんなにゴルフに打ち込んだとしても、スポーツとは全く違う分野に就職せざるを得ない現状があり、仙台大学のようにスポーツをキーワードに、さまざまな職種へ着く可能性が開けるというのは非常に羨ましい環境です」と述べられました。

その後、受け渡しが終了したばかりのLC棟(ラーニングcommons)をはじめ、低酸素室、第3体育館のトレーニング施設、ATルーム、学食での栄養分析など本学施設を隅々まで見学し、それぞれの担当者と活発な質疑応答が続けられました。

仙台大学主催「第2回学術講演会」を開催ー体育学の未来を考える



左から宮西・小浜・阿江・岡出・小松の各教授＝東京エレクトロンホール宮城

2月28日(日)、東京エレクトロンホール宮城(仙台市青葉区)6階会議室で、仙台大学学術会(小浜明代表幹事)による「第2回学術講演会」が開催されました。テーマは「体育学の過去・現在・未来」。バイオメカニクスが専門の阿江通良教授(筑波大学)と体育科教育学が専門の岡出美則教授(筑波大学)をお招きし、哲学が専門の本学の小松恵一教授を交えて、それぞれの立場から体育学の過去・現在・未来について討論されました。同講演会には、教育関係者ら約25名がご参加下さいました。司会・コーディネーターは、本学の宮西智久の各教授が務めました。

阿江教授は「体育とは、スポーツを含む身体運動を手段もしくは目的とする教育・学習活動である。狭義では学校教育課程の一教科、広義では就学期以外のライフステージを含めた教育・学習ととらえられている。体育を少し広く見ると、「生活を体育的にデザインする」という発想も出てくるであろうし、われわれの体育・スポーツとの付き合い方も変わるのではないかと指摘。岡出教授は「体育の授業がどのような学習成果を誰に対して、どの程度保証してきたのかに関する実証的なエビデンスの蓄積は乏しかったが、1980年代以降に体育科教育学の研究で、授業の成果と教師行動、学習指導計画の質の改善に向けたデータの蓄積やプログラム開発も積極的に進められるようになった」と紹介。小松教授は「スポーツ科学、体育学も一種の応用科学であるとすれば、そこで問われるべきは、莫大な知の蓄積とスポーツの現場との関係である。学校教育における体育、さらには日本特有と言うべき運動部活動と蓄積された知が、どのような媒介関係にあるか、あるいは両者の架橋如何というべき問いである」と強く訴えました。

演者と参加者による質疑応答も実施され、体育学の未来について考える充実した講演会になりました。

OB紹介・ホテルベルエア仙台 取締役 統括部長 高野竜雄さん



ホテルベルエア仙台の玄関前で笑顔を見せる高野取締役統括部長

現在、JR仙台駅から徒歩12分に立地する「ホテルベルエア仙台」で取締役統括部長を務める高野竜雄さん（平成9年体育学科卒）は本学の卒業生。

「ホテルベルエア仙台」に伺い、ホテルの第一線で活躍中のOB高野さんから、同ホテルに就職したきっかけや仕事上で心がけていること、今後の抱負などについてお話を聞きました。

「負けたくない」という気持ちが原動力

Q1.就職したきっかけは—

大学4年時に、学生結婚しました。必死に就職先を探していた時、当時、就職課の職員だった中鉢芳尚さん（現創職担当課長）に相談したところ、本学の高野昭（たかの あきら）先生（故人）をご紹介下さいました。高野先生は「ホテルベルエア仙台」のオーナー経営者でもありました。高野先生から「体育会系はホテルマンに向いている」と言われ、「とりあえずやってみよう」という気持ちで、ホテルの世界に飛び込みました。

Q2.ホテルの仕事は—

ホテルマンの仕事は、フロントからベル・ドア・ウエイター・営業・企画と多種多様。ベルエア仙台は、平成8年4月にオープン。私は、ホテルオープン2年目に入社。ホテルは、できたばかりで人気も知名度も低く、

お客様が来ない状況にもかかわらず、学生の延長線上の気楽で未熟な考えのまま1年が過ぎました。しかし、私はサービスの「サ」の字も知らなかったはずなのに、一通りの仕事を覚えただけで“出来た感”があり、勘違いしていました。当時の上司から「お前、なあなあで仕事してんじゃないよ」と怒られて、目が覚めました。それからは、業務と真剣に向き合うようになり、売り上げを伸ばすためにあらゆる側面から物事を考え、食欲に働くようになりました。

Q3.仕事上で心がけていることは—

自分が先頭に立って実行することを心がけています。また、一緒に働いているスタッフに気を遣えなければ、お客様により良いサービスを提供することはできません。さらに、現場では、要領の良さ、段取りの良さ、機転が利くことが求められます。何事も、基本がしっかりできなければ、応用（機転）はできません。お客様の喜ぶ顔を想像しながら、日々仕事に取り組んでいます。

Q4.今後の抱負—

まずは、仙台でナンバーワンのホテルになることです。仙台には様々なホテルが建ち、競争は激化していますが、「負けたくない」という気持ちが私の原動力です。当ホテルにしかできないオリジナルのスタイルを追求し、人とのつながりを大切にしながら、自分自身も成長していきたいと思います。

Q5.後輩達へのメッセージ—

後輩たちの活躍を新聞やテレビなどで見る機会が増え、嬉しく思うと同時に大変誇らしく思っています。人生は、人との出会いや巡り合いが大切だと思います。また、自分の考え次第で可能性は広がるし、逆にゼロにもなります。社会は、物事を前向きに捉える人、素直な人、果敢に挑戦する人を求めています。後悔のない、幸せな人生を歩んでほしいと心から祈念しています。

PROFILE

高野 竜雄（こうの たつお）／ホテルベルエア仙台 取締役 統括部長



昭和49年10月28日生。B型。静岡県下田市出身。仙台大学体育学部体育学科卒。大学時代は、準硬式野球部所属。4年時春にベストナイン（外野手）に輝く。

趣味は「スポーツ観戦」。好きな食べ物は「コロッケ」。

座右の銘は「自分の意志で未来を創る」。

【職歴】平成9年4月ホテルベルエア仙台宿泊部に配属。

その後、宿泊部主任・宿泊部課長・支配人を経て現在に至る。